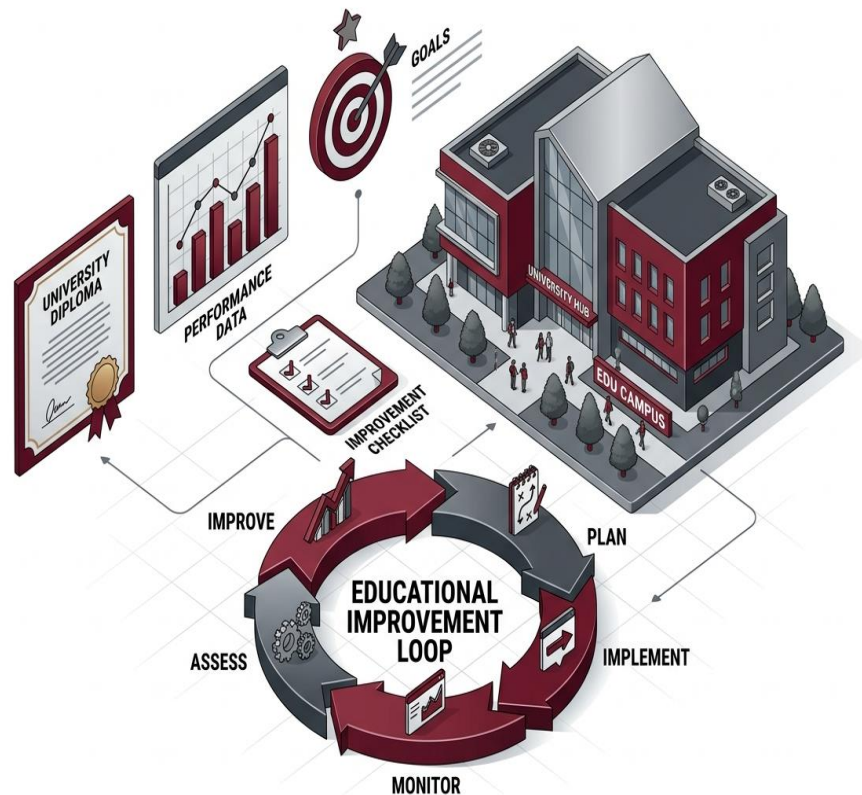


2027年度試行評価 / 2030年度本格実施対応

2030年度 「新たな評価」 対応ガイド

大学が今から整理しておきたい
認証評価・内部質保証のポイント

ハーモニープラス株式会社



認証評価への準備、
「評価の直前」に始めようとしていませんか？

💡 新たな評価では、受審直前にエビデンスをかき集める「イベント型対応」ではなく、日常的に学修成果を把握し教育改善につなげる「組織的な仕組みそのもの」が評価されます。

これまでの認証評価

- 大学全体の基準適合確認が中心（Pass/Fail判定）
- 評価受審直前に資料・エビデンスを集中整理
- 担当部署による一時的・イベント的業務になりやすい
- 内部質保証がカリキュラム改善まで至りにくい

新たな評価（2030年度本格実施～）

- 全体体制確認 + 学部等ごとに教育の質を4段階評価（
要是正／1★／2★／3★）
- DP達成度を軸とした日常的なデータ蓄積・把握が前提
- 教員直接評価・学生間接評価・社会評価を総合判断
- 評価結果が私学助成金配分等の経営支援に連動

▶ 評価を受けるための準備から、継続的に教育の質を高める仕組みへ

【一階：基盤】大学全体の「内部質保証体制」

全学における内部質保証の組織・ルール・改善サイクルが機能しているかを評価機関が適合確認

【二階：中心】学部等ごとの「教育の質評価」 [4段階公表（要是正／1★／2★／3★）]

① 直接評価

ルーブリック評価 / GPA /
キャップストーン / 卒業論文・課題

② 間接評価

全国学生調査 / 学内意識調査 /
学習時間アンケート

③ 社会からの評価

卒業生追跡調査 / 就職先企業アンケート
/ 評価

 日常の教育成果エビデンスが、そのまま評価の起点となる

STEP 01 2026年度

現状整理・学内課題把握

- DP・保有データの棚卸し
- 課題と優先領域の明確化

STEP 02 2027年度

試行評価踏まえた対応

- 試行評価動向の把握
- DP・指標対応表の試行

STEP 03 2028-29年度

データ蓄積・運用改善

- 各学部での運用定着
- PDCAサイクルの回旋

STEP 04 2030年度

新たな評価 本格実施

- 蓄積エビデンス受審
- 継続的な教育の質公表

 2030年度になってから準備するのではなく、今から日常的な仕組みを整えておくことが重要

01

何を把握するか

DPを「達成度を測れる形」に具体化・
成果指標を定義する

02

どのデータを使うか

成績・直接評価・
間接調査等、使用データの
種類を決定

03

どうデータをつなぐか

分散するDP項目と
学内各種データの
対応関係を紐づける

04

誰が確認するか

評価委員会・学部・
IR等の役割分担と年間
審議ラインを設計

05

どう改善につなげるか

分析結果をカリキュラ
ム変更・学生支援へ繋
げる運用をつくる

 5つのポイントが繋がって初めて、「内部質保証の仕組み」として機能する

① 何から整理すればよいか不明

制度変更の全貌と自校の現在地のギャップが見えない

② DPと学修成果が未接続

DPが抽象的表現のままで到達度指標が存在しない

③ データが各部署に分散

教務・IR・学生支援ごとにシステム・エクセルが独立

④ 学生調査が活用されていない

アンケートを実施しているが集計・改善に繋がらない

⑤ 改善の責任・体制が曖昧

分析結果を誰がどのように教育改善するか未定

⑥ 担当者のリソース不足

通常業務で手いっぱい、上流検討に時間を割けない

⚠ 問題は、データがないことではなく、教育改善につながる形で整理・運用されていないこと

Before : 直前慌て対応

- DPが抽象的で評価指標がない
- データが各部署に散在・未統合
- 受審直前の単発集計と資料作成
- 特定担当者の個人技に依存
- 自己点検のたびに膨大な作業負荷



After : 日常の継続改善

- DPと到達度指標が1対1対応
- 必要データが日常業務で自動蓄積
- 学部・執行部が日常ダッシュボード確認
- 課題発見から教育改善へ即接続
- 認証評価提出資料にそのまま活用可能

 認証評価対応を“イベント”から“日常の教育改善”へ

【設計・データ】

- DPごとに「何をもって達成とするか」が整理されている
- DPと学修成果を測る指標が対応している
- 直接評価・間接評価に用いるデータが整理されている
- 全国学生調査やアンケートを教育改善に活用できている
- 成績・アンケート・IR等のデータを横断確認できる

【運用・体制】

- 誰が・いつ・何を確認するか決まっている
- 分析結果を教育改善につなげる運用がある
- エビデンスを継続的に蓄積できている
- 特定の担当者だけに依存しない運用になっている
- 2027年度以降を見据えた学内ロードマップがある

 チェックが少ない場合は、まず“現状整理”から始めることをおすすめします

STEP 01 現状診断

自己点検・評価の進め方、DP、学内データ、既存システムを棚卸しし、優先順位を整理

【成果物例】
現状診断レポート

STEP 02 DP・指標設計

DPを達成度を測れる形に整理。直接・間接評価との対応表、データ整備計画を作成

【成果物例】
DP・指標対応表 / データ整備計画

STEP 03 運用・定着

誰が・いつ確認し教育改善に繋げるかを設計。可視化環境を整えエビデンスを継続蓄積

【成果物例】
運用設計書 / 可視化ダッシュボード

❶ システム導入から始めるのではなく、目的・運用・データから整理する

現状を整理する

大学の現在地と課題を客観的に可視化

学内に入り込む

教職員・各部署へ
密着ヒアリング

仕組みを設計する

DP・指標・運用・データを整理

定着まで伴走する

教育改善につながる運用を支援

【具体的な支援領域】

・認証評価・内部質保証支援 ・IR／データ分析 ・データ基盤整備 ・学修成果可視化 ・業務改善／DX支援

※ 学修成果可視化システム「学修成果MOE」等は必要に応じて活用する選択肢の一つとしてご提案します。

 **大学経営・教育改善の「伴走パートナー」として支援します**

認証評価への準備、まずは現状整理から。

「何から始めればよいかわからない」という段階からご相談いただけます。

【無料】初回の現状ヒアリング・簡易診断（60分）

自校のDP整理状況、データ蓄積状態、学内体制をヒアリングし、今後の準備ポイントをご提供いたします。

問い合わせフォーム：<https://www.harmony-plus.co.jp/contact/>

 **まずはお気軽にお問い合わせください**